私の意見

〝生活に豊かな楽しみを〟地域に愛されるメディアを目指す

福田　勝三〈株式会社ケーブルネット神戸芦屋　代表取締役社長〉

今年1月1日、こうべケーブルテレビ(株)と(株)ケーブルコミュニケーション芦屋が合併し、(株)ケーブルネット神戸芦屋が誕生しました。対象エリアは神戸市東灘・灘・中央・兵庫の4区と芦屋市の計27万世帯で、3月現在の加入世帯数は神戸市内が2万450、芦屋市内が7350、計2万7800世帯を数えます。

地域行政の単位で発展し、マイナーなイメージが強かったケーブルテレビですが、CS（通信衛星）放送の「スカイパーフェクTV」などの人気チャンネルを自社のメニューとして取り込んだり、インターネット接続サービスを始めるなど魅力ある展開で着実に加入世帯を増やしてきました。特にインターネット接続は、通信速度のずば抜けた速さと安さが人気で、近い将来、ご加入者の約半数は利用してくださることと期待しています。

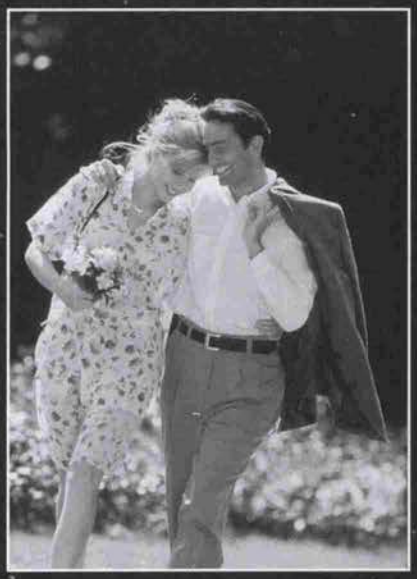
当社の番組は、兵庫県はもとより関西においてもトップクラスのチャンネルラインナップ（全45チャンネル―神戸局）を誇っており、さらに加入者へのサービス向上のため充実したいと考えています。現在、5と9の2チャンネルを自主制作しており、番組内では神戸市の行政やイベント情報など身近な役立つ情報を紹介しています。また、毎月2週間ごとに更新する看板番組「J！パラダイス―神戸・芦屋」では、話題の店や商品、地元の企業や人、町の歴史などにスポットをあてています。

当社では昨年7月より大幅な組織改革を行い、コールセンターを新しく設置するなど、きめ細やかなサービスを迅速にお客さまに提供できるように努めてきました。その結果、震災からの経済復興はまだまだといわれていた神戸でも、昨年後半から加入世帯の増加が著しくみられ、生活を楽しむためにお金を出す、消費生活は元気を取り戻しつつあると実感しています。ケーブルテレビであれ、インターネットであれ、これらが創り出す「楽しみ」を生活の中に送り込むのが私たちの仕事であり、地元の方々にできるサービスと考えています。

今年12月に開始されるBS（放送衛星）テレビ放送のデジタル化によって、家庭での受信はより情報豊かで快適なものになるでしょう。そのための多額の設備投資と通信サービスの競争の激化は必至です。しかしながら、今回の合併で体制を強化しつつある当社では、常に新技術を取り入れた質の高いサービスの提供を心がけ、地域に愛されるメディアとして日々新鮮な話題を発信していきたいと思っています。

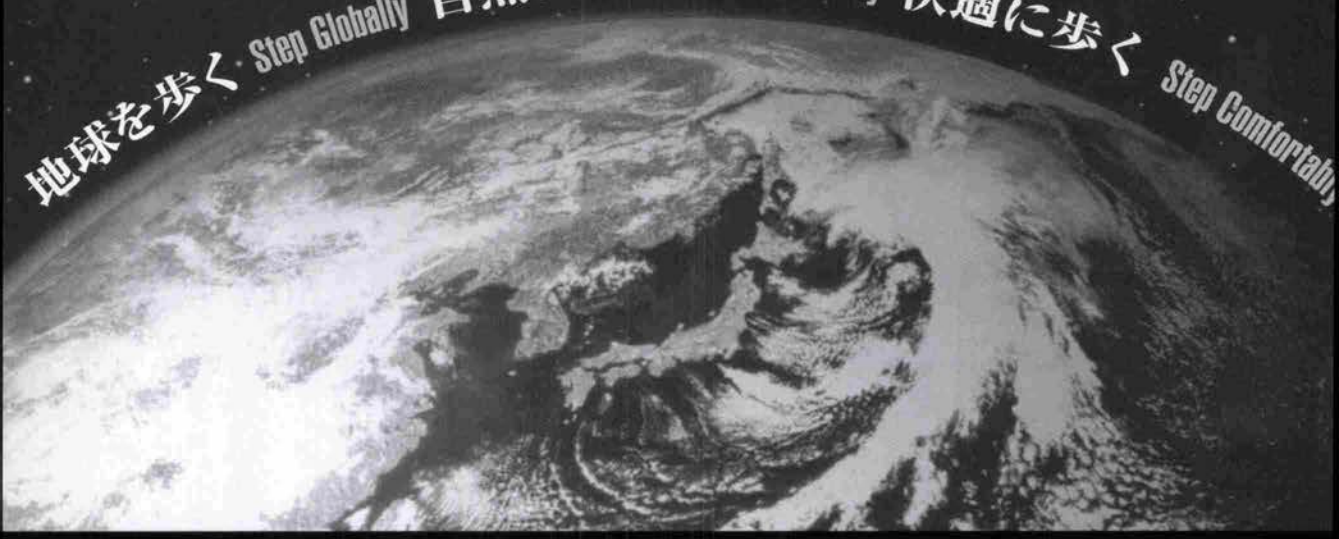
My Opinion

アリスの健康靴 - 足に合った正しい靴で快適歩行をサポート



現代生活の中で、私達の足には大きな負担がかかっています。これからの足の悩みを予防されたい方にも、既に、足の痛みに悩まれている方にも、足に合った正しい靴をはかれることをお勧めします。 株式会社アリスは、最新の整形外科水準に基づいて作られたドイツ製健康靴を中心に、多くのブランドを取りそろえ、皆さまの快適で健康な生活をサポートすることに全力を注いでいます。月に一度、無料のクリニックデイも設けておりますので、お問い合わせください。経験豊かなスタッフと専門技術を持つ整形外科靴マイスターと共に、皆さまのご来店をお待ち致しております。

代表取締役社長 アリス・クリスチャンス



Japan's Premier Health-Shoe Specialist
高級健康靴と関連資材輸入・機材輸入

アリス

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通り5-6-6
TEL:078-382-2101 FAX:078-382-2150
営業時間:10:30a.m.~6:30p.m.年中無休

西宮市自宅にて。衣里さんと秋咲子さん（右）　撮影／森田篤志

KOBECCO 2000

中谷　衣里

作家としての新たな出発

ERI NAKATANI
〈作家〉

この春、文芸社より処女作『愛と哀しみの落日』を上梓した。神戸を舞台に、男と女、大人の恋と別れの情景を描いた四遍。「ずっと小説を書いてたなんて誰にも話したことなかったんです」

以前の肩書きは、トアロード、北野に「サントノーレ」という老舗を経営するオーナー。故遠藤周作さんが名付けたという店名があらわすように、文筆家、文化人との交流も多く、喫茶店、ブティックを経営した時代もあった。また、バンドを結成し歌手として舞台に立つ一方で、「グレート・ブルー」の安藤義則さんらとともに知的障害者の施設を訪ね、音楽を通したボランティアなども精力的に行っていた。

震災の年の秋に三〇周年を迎えようという矢先、店が全壊。「ピリオドを打とうとしていた時だったのでふん切りがつきました」。と話すが、そのショックは大きく、以来声を出せない日が続いた。次第に自室に引きこもりがちになる衣里さんを心配した、お嫁さんの秋咲子さんが、初めて入った書斎の机の上に夥しい量の原稿が重ねられているのを見つけた。それらを秋咲子さんが内緒で出版社に送ったのがデビューのきっかけ。「書くことがこれからの衣里さんの道だ！って、閃いたんです」と秋咲子さん。現在、秘書として衣里さんを支えている。

いま、作家として新たな人生の一歩を踏み出した。しかし、それは決して一からの出発でなく、これまでの人生を土台にした確かな出発である。

〈宇都宮〉

＊『愛と哀しみの落日』は4月28日発売。次作、長篇『恋すてふ』の出版も決まっている。
なお、5月22日には関西での出版記念パーティーが甲子園都ホテルにて行われる予定。

川上　盾

心の解放をもとめて

JUN KAWAKAMI

〈日本基督教団東神戸教会牧師〉

東神戸教会にて　撮影／森田篤志

御影にある東神戸教会に赴任してきたのが震災の二年後。自分の育った京都とは違う「都」に憧れのような感情をもち、復興のために何かやろうという意欲とともに、その使命や責任の重さを感じていた。

二年前から宣教活動にプラスして、教会を拠点としたKOBE Mass Choir（神戸マスクワイア）を立ち上げてゴスペルの指導にあたっている。「アメリカでは牧師がギターを弾いて歌うのは当たり前ですが、日本ではまだ珍しがられます」。今年の二月には一万人の第九の向こうを張って「700人のOh,Happy Day」と題するゴスペルコンサートを開いた。これは東灘区区政五〇周年復興記念事業の一つ「夢実行コンクール」に応募し優秀企画賞に輝いたもの。企画運営実行にわたるすべてを自分たちで行った。

流行りや格好良さだけでゴスペルを歌っているのではない。白人に迫害され、奴隷として強制労働を強いられたアフロアメリカンたちの歴史を知り、彼らを勇気づけた音楽として生まれたゴスペルを理解することに重きを置いている。「海の向こうで抑圧されていた人々に生きる希望を与えた音楽ですから、今の日本でも病んでいる人々の心を癒すことができるはず」

現在はコンサート主体ではなく、教会や骨髄バンクキャンペーンなどのイベントで歌うことが多い。「歌うことでまず自分たちの心が解放されます。いい意味での素人臭さはなくしたくないですね」　〈前田〉

MOTOMACHI LA LUCE

→元町商店街に「光と希望」の花が咲く
3月24日、元町一番街のガラスアーチと、花々のガラスアートがきらめく舗道が完成。テープカットの後、元町一番街辻理事長、蓮池副理事長、ガラス造形家三浦啓子さんらも加わり、完成パレードで舗道の渡り初め（写真左）

↓春の訪れとともに「神戸らん展2000」開催
3月28日から4月2日まで、「神戸らん展」が神戸国際展示場で開かれた。コンテストのほかにも、和紙のちぎり絵展や兵庫県いけばな協会の展示なども開かれ、話題を集めた

←神戸に新たな音楽シーンが誕生
インターナショナルCDストアチェーンのHMV神戸店が「HMV三宮」としてセンター街のE.I.Tビル地下1階に4月21日にオープン。関西では最大の売場面積とフルジャンルの品揃えの豊富さをほこる（左が高岡淳人店長、中央はポール・デゼルスキー代表取締役社長）

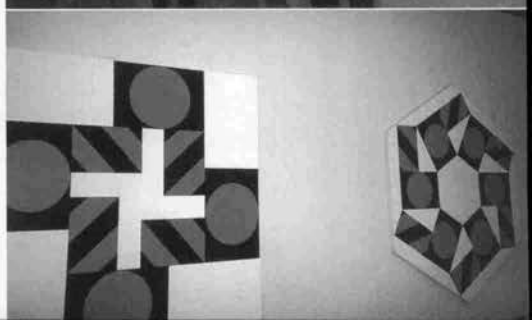
K O B E コウベスナップ S N A P

→↓上川庄二郎・福田太加志写真展「ノルウェー紀行」
元神戸市消防局長・上川庄二郎さんと福田太加志さんの写真展「ノルウェー紀行」が神戸市青少年科学館で開催。上川さんの「極地の国の福祉国家 ノルウェーに学ぶ」の出版とあわせて3月18日祝賀会を開いた

←左から上川さん、衆議院議員・滝実さん、福田さん、司会の村上和子さん（祝賀会にて）

↓鈴木敏薫展Gallary翔で
三木市に住む抽象画家の鈴木敏薫さんが古稀を迎え、若々しいモダーンアートを披露した（3月9日～14日）

→パリに生きた抽象画家「菅井汲展」
4月8日から兵庫県立近代美術館で、1919年神戸で生まれ、パリで抽象画家として一世を風靡、1996年帰国中に神戸で急死した菅井汲の回顧展が開かれた。写真上は開会式、写真中は菅井夫人を囲んで、写真下は作品群（6月4日まで）



←↓明石城巽櫓、坤櫓、震災からよみがえる
大震災で崩れた国指定重要文化財の明石城、巽・坤の両櫓と白土壁が、3月11日美しくよみがえった。姫路城と姉妹城になる明石市民のシンボルは、なんと伏見城（慶長大地震で崩壊）から移されたという。完成式当日は獅子舞いの披露も（写真下右）

↑「水の科学博物館」リニューアルオープン
4月2日平野の「水の科学博物館」に"神戸水道発祥の地"碑が誕生。博物館もリニューアル。この日は市内の小学生も招待され、水のふしぎを楽しく学んだ

←櫓の前で。大和松蒔さん、井藤圭満さん

→おめでとう深川和美さん
声楽家深川和美さんの神戸市文化奨励賞受賞のお祝いパーティが3月27日リンズギャラリーで開かれた

KOBE コウベスナップ SNAP

←神戸にささげた生涯―故・宮崎辰雄前神戸市長葬
「神戸市は神戸市民のためにあり、市政は神戸市民とともに歩むべきもの」。昭和12年から平成元年まで市政で働いた宮崎さんとのお別れ会は、神戸文化ホールで4月8日に開かれた。栗原小巻さんの弔辞（写真上）と音楽葬（写真中）は感動的。写真下は新野幸次郎実行委員会委員長とご遺族

←↓懐かしの佐治敬三さん「ローハイド」をきく会
お酒を愛し音楽を楽しみ、絵画を文学を語り、大阪を愛したサントリーの故・佐治敬三会長をしのぶ会が、3月23日ホテル阪急インターナショナルで開催。写真左は安藤忠雄氏、写真右はバスケットボール部の面々

↓しぼりたてを楽しむ会盛況
神戸酒文化懇話会が、3月22日の夜、新神戸オリエンタルホテルにて「大黒正宗」「酒豪」「灘蛭」「福寿」「灘泉」などの各蔵元自慢の"しぼりたて"を飲む集いが開かれ、約150人が舌鼓をうった。写真左は「灘泉」泉勇之助商店、写真右は「福寿」神戸酒心館のコーナー

神戸で4年ぶり！

国際Aマッチサッカー 神戸決戦

3月15日
神戸ユニバー記念競技場

日本代表VS中国代表

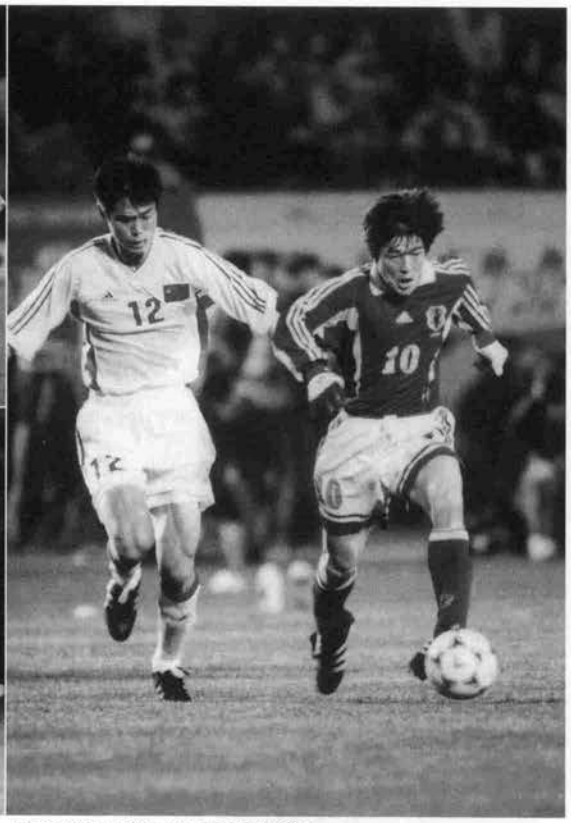
日本と韓国で共同開催される、2002年FIFAワールドカップに向けて、3月15日午後7時、神戸総合運動公園ユニバー記念競技場にて、日本代表対中国代表戦がキックオフされた。神戸では、1996年10月以来の国際Aマッチで、スタンドは4万人の熱きサポーター達で埋め尽くされた。

今回のゲームは、世界で活躍中の中田・名波・城を召集し、五輪代表メンバーの中村・小野・稲本らも加わり、最強の布陣となった。中田を中心とした、中盤からのパスや、フリーキックなどの多彩な攻撃に、スタンドから大きな歓声がわきあがるさまは、早くもワールドカップ開催中かと思うほど。試合終了間際にカズが投入され、驚きと喜びでスタンド中がどよめきたった。

試合は残念ながら0—0の引き分けだったが、終始日本がゲームを支配し、とても内容のある戦いを見せてくれた。試合終了後、闘志むき出しプレーの中山は「勝つためにピッチに立ったのだが」と、とても悔しそうにしていた。

ここ神戸でも、御崎公園スタジアム（仮称）で、ワールドカップサッカーの試合が開催される。それに向けて、神戸のサッカー熱も徐々に盛り上がりを見せている。大会の成功を願って。

〈大原宇勉〉



稲本ら若い世代の台頭も（写真上）
スペインの熱い血を感じさせる城（写真下）

ベネチア仕込みの鋭いドリブルを見せる名波

日本代表の要・中田は絶妙なパスを連発し、会場を沸かせた

「チャンスは多かった」と中田。2002年に期待がかかる

チーム最年長となっても精力的なカズ

撮影／米田英男

「落地生根」編纂委員会

ある集い★社団法人 中華会館

百年史編纂のお話がでたのは、十数年前のことでした。神戸開港以来、華僑はすでに百十数年この地に居住し、神戸華僑についての史料は若干ありますが、神戸華僑の歴史を体系的に書いた書物はまったくございませんでした。社団法人中華会館とともに、編纂委員会を組織し、中国や華僑について専門的に研究されている諸先生方のご協力をえて、長い年月をかけて編纂、今年二月に、神戸華僑と神阪中華会館の百年史「落地生根」の出版の運びとなりました。

執筆にあたり、まずその史料を集めるのに奔走しました。神戸空襲、神戸大水害、また阪神・淡路大震災での史料の損失、そして華僑の諸先輩方も、多数物故されており、大変苦労をいたしました。

神阪中華会館の百年のあゆみは、すなわち神戸華僑のあゆみでもあります。「落地生根」—その地に落ち、根を生やす、住み着くということです—は、華僑の先輩たちの苦労や、政変等による当時の複雑な思いを、次世代に分かっていただける内容ともなっております。そして、日本の友人の皆様にも、華僑について多少なりとも理解していただけると思います。

〈編纂委員長　詹永年〉

編纂委員　写真後列右から／游賢徳・曾士才（法政大学国際文化学部教授）・林聖福・李睿明・詹永年・孫喜生・劉莉華（編纂委員会事務局）前列右から／柯清宏・洲脇一郎（神戸市教育委員会総務部主幹）・安井三吉（神戸大学国際文化学部教授）・王柏林・陳来幸（神戸商科大学商経学部助教授）・過放（龍谷大学非常勤講師）

（欠席／文啓財・李萬之・楊錦華）

■連絡先／社団法人中華会館
神戸市中央区下山手通2・13・9
TEL078・392・2711

“ガンバレ台湾”
親善日華青少年野球大会

ある集い★国際ロータリー第2680地区神戸第２分区

昨年九月二十一日、M.7.7という大地震が台湾中部を襲いました。災難を受けられた人々に何か元気づけることはできないかと、数名のロータリークラブ会員が言い出しました。この会話はあっという間に神戸第二分区、会員三六〇人の意志として広がり〝ガンバレ台湾〟親善日華青少年野球大会草案が昨年暮にはできあがりました。台湾の被災地の少年野球四チーム（約百名）を日本へ招待し、日本のチームと親善試合を行うということです。

目的は㈠「心のケア」震災による心の痛手を少しでも慰めてあげよう。㈡「心の交流」同世代の少年などとの国際理解。㈢青少年などに心に残る思い出を作り将来の国際親善に役立ててもらおうの三つです。

好天に恵まれ、グリーンスタジアム神戸のサブ球場にて、二日間に八ゲームの白熱した好試合が行われました。来日少年たちを一番喜ばせたのは、スタジアムの大観衆の中でプロの選手によるシートノックなどの練習をさせていただいたこと、その後、プロ野球公式戦のオープニングゲームを観戦できたことでした。人気歌手ビビアン・スーさんの始球式の球を受けたキャッチャーも衝撃的な思い出であったろうと思います。四月二日の送別会では三〇〇人の関係者が一堂に会し、すっかり仲良くなった両国の少年たちがテーブルを囲み多いに歓談？ している様子はたいへん微笑ましい風景であり、この大会の成果を物語っておりました。

日華両国の方々のご協力を心より感謝いたします。

〈大会会長国際ロータリー二六八〇地区 神戸第二分区代理　山崎良麿・ホストクラブ 神戸ハーバーロータリークラブ会長　鍋島俊樹・大会実行委員長　迫田孝二〉

■問い合わせ／神戸ハーバーロータリークラブ事務局
神戸市中央区東川崎町1・3・5
神戸ハーバーランド・ニューオータニ8F
TEL078・362・2692

●2000年ミレニアムの春に集う

KOBECCO祭り盛大に

月刊神戸っ子39周年記念パーティー

桜の花も満開の4月10日、小誌創刊39周年を記念して「神戸っ子祭り」がホテルオークラ神戸にて華やかに開かれた。文化賞「神戸っ子賞」「ブルーメール賞」の授賞式も行われ、ゲストにペギー葉山さんを迎えたショータイムでは会場は大いに盛り上がり、なごやかなひとときを過ごした。

500名大交流

貝原知事（右）の祝辞。左は佐井と小泉

ドラを叩く角本稔さん

上甲裕久さんと久保佳子さんのミレニアムダンス

乾杯は吉本晴彦氏

ヴィッセル神戸の石末龍治さん（左）と松本勝利さん

山下助役（左）と中西勝画伯

「神戸っ子祭り」は、異空間？

上村　亮太〈美術家〉

私は晴れがましい場所が苦手で、これまでパーティーに出席することもほとんどなかったのですが、この度、初めて神戸っ子祭りに参加させていただきました。私にとって、神戸っ子祭りは、とても不思議な体験でした。まず、様々な分野のたくさんの人が出席されていることに驚き、そして、ドラの音が鳴り響き、サンバやコンサートの宴もたけなわになってくる頃には、まるでフェリーニの映画を見ているような、不思議な感覚すら覚えてきました。きっと、一人の人を大事にされてきた年月があればこそ、この、不思議で確かな、人々の繋がりの空間である「神戸っ子祭り」を創り出せるのだろうなあと、改めて感じるとともに、なにかが生まれそうな場所でもあるのだろうなあ、と感じました。

ときめきの渦

由良　佐知子〈詩人〉

花雨の中を集い来る人々のときめきは、さざなみのように会場を満たす。ドラの音と、上甲裕久さん、久保佳子さんの軽やかな舞で宴は始まった。兵庫県知事・貝原俊民氏、神戸っ子賞を受賞された新野幸次郎氏らの和やかな笑顔のメッセージが続く。

春の祭りはいい。待ちわびた桜に今年

熱唱するペギー葉山さん

吉本晴彦さんの乾杯の音頭

ペギー葉山さん（右）と秋満義孝さん

新野幸次郎さん（左）と田端基宏さん

上村亮太さん

由良佐知子さん

林裕さん（右）と司会の村上和子さん

(財)神戸ファッション協会専務理事の藪野正昭さん

上甲裕久さん

林裕夫人の恵理さん

も会えた喜びを、隣りにいる人に伝えたい。そんな気持ちがうねって祭りになる。震災のあと、信じられないほどの力で蘇った街を、陰で支えあった人たちだから。それぞれが異なる分野に励みながら、さらに引き合う。「神戸っ子祭り」はそんな場所をながく創ってきた。

ショータイムのペギー葉山さんの歌と秋満義孝さんのピアノは、「懐かしいあの頃」に引き戻す。変わらぬ歌唱力に聞き惚れる。ご両親にまつわる神戸の想い出の箱をそっと開く美しい人。

一転して画家たちが登場する。舞台の女性たちが支え持つ大きな紙に、一気にミューズを描くというのだ。線が走ると、伸びやかな肢体が躍動する。奇抜さの中に神戸の粋が香る。

なるほど、神戸はなんでも似合ってしまう街なのだ。明るい日差しに光る海も、空と区別のつかない鈍色の海も。いろいろな人がさざなみ混じり合って、自らを輝かせる。そんな渦を「神戸っ子」は海の底からおこしてきた。文学の畑の片隅で一輪、私は多くの人に支えられ小さな花を開かせてもらった。演劇、音楽、映画、美術などが若い世代にも、もっと近づく街を願っている。

久しぶりの神戸

ペギー　葉山〈歌手〉

久しぶりの神戸には、震災後の著しい復興とエネルギーにあふれていました。

チャリティー大会はじまりはじまり

やったー！
ビールの早飲み一等賞の西正興さん

望月美佐先生の書が
大当たり中村夫妻

丹野最世子さん（左）と村上美穂さん

ヴィッセル賞は
高島さんに

浜本律子さん（左）と中西勝画伯

バスキー賞は
サンヨー環境の長内さんに

王少飛さんと友藤紀子さん

「月刊神戸っ子」も創刊39年を迎え、私も何度かご縁があって、イベントに参加させていただきましたが、今回はホテルオークラ神戸の大宴会場に多くの皆さまのご出席を得て大変な盛りあがりでした。

20分のショーは私としてはチョッピリ物足りなさはあったとしても、とても楽しい雰囲気の中で歌うことができて幸せでした。益々の皆さまのご発展をお祈り申し上げます。

今年は歌手生活50周年の記念すべき年で、この夏から全国でリサイタルを開きますが、そのスタートが兵庫地方からです。プログラムの中には「ペギーと歌おう」のコーナーもあり多くの皆さまのご参加を呼びかけております。

記念すべき年にまた、素敵な出会いがあることを心から願っております。

〈ペギー葉山リサイタル〉
7／4（火）加古川市民会館
7／5（水）三木市文化会館
7／6（木）山崎文化会館（中六寒）
7／7（金）西脇市民会館
7／8（土）明石市民会館
7／9（日）姫路市民会館

桜と雨の4月10日。神戸っ子祭りへご参加ご協賛ありがとうございました。来年は21世紀。神戸っ子も40周年です。新しい神戸の街づくりに全力投球いたします。ご声援下さい。

代表取締役・主筆　小泉美喜子

KOBECC

KOB

神戸のアーバンデザイン⑤

―南京町の賑わい「落地生根」―

↑春節祭での龍の舞い。色あざやかな龍が豪快に体をくねらす

→いつも観光客で賑わっている南京町のメインストリート。屋台においしそうな食べ物が並ぶ

武田則明
〈建築家〉

神戸開港は明治元年であり、開港を祝って英国の旗艦ロドニー号は祝砲を撃った。この船の模型は神戸海洋博物館に展示している。また元町6丁目のアーケードには、そのミニチュアがぶら下がっている。

開港時に欧米列強国の人々とともに当時清国人であった華僑の人々も長崎から神戸に移り住んだと伝えられている。当初は「無条約国民」であったため、法的には「西洋人付属」の華僑、つまり西洋人の召し使いや使用人だけが居留を認められる存在であった。居留地は欧米列強国の対日条約国のみ住める場所であった。中華街は居留地に隣接して設けられた。横浜の中華街は居留地である関内に隣接している。

居留地は欧米のなかでも特に英国がいちばん多く、支配的でその上良い場所を占拠していたので、英国風の街並みを形成していた。特に貿易・船会社・金融・保険を中心とする業務地域を形成しているために文明開化の雰囲気を伝えているようでもある。これに対して南京町は中華料理を中心に食材店が並び食事時や有名店では長蛇の列ができる盛況を呈している。看板が連なり、料理の煮たの、揚げたの、美味な匂いと、音楽、そして人々の雑踏が絶えない、素晴らしい賑わいの風景である。一時寂れたこの街は区画整理事業により、道路と中央の広場が整備された。広場には中華風の四阿や石の彫刻が並び、区画整理事業にともない、建物が新しく建て替えられて、また若者たちが戻ってきた。春節祭などのお祭りの龍の舞は有名である。現在ではすっかり神戸の名物となっている。

華僑の人々がつくった社団法人中華会館は、このたび神戸開港から今日までの華僑の歴史をまとめて「落地生根」を出版した。もともと華僑の人々は財を成し、帰国して骨を故郷に埋めること「落葉帰根」であった。

すでに130年以上の歴史をもち3世4世の時代となり「落地生根」すなわちその土地に根を生やし、神戸に骨を埋める世代となったことを示している。この木は居留地時代に始まり、不幸な戦争の時代を経て現代まで生き抜いた華僑の人々の歴史である。それは同時に神戸の歴史でもある。これからの時代ますます国際港湾都市として発展していかなければならない神戸にとって、この本は大切な示唆を与えてくれる。ぜひ大勢の皆さんに読んでいただきたいと思う。

神戸のモダーンリビング⑤

―花と緑に囲まれた住まい―

↑正面外観

↓棚のある階段・玄関ホール

玄関まわり

花に囲まれたデッキスペース

庭へのアプローチ

中川倶子
〈(株)アルプラン〉

震災後、竣工したNさんの住まいは花と緑を中心とした住まいです。

Nさんの敷地は傾斜地のため、庭の南側は高さ1メートルの隣家の擁壁が迫っています。普通に考えれば居間・食堂を東西へ一直線に揃えたいところですが、それでは壁を見ながらの生活になってしまいます。そこで、ダイニングとリビングを斜めにふり、西側の花壇や道路へ視界へ広がるように配置したほか、デッキを設けて庭と部屋の間を気軽に出入りができ、より庭が身近に感じられるようにしました。

また、周辺の人たちに楽しんでもらえる「見せる庭」を創り出すために、道路側の既存の擁壁を壊し、道路に面してレンガの花壇を新たにつくりました。そのスペース分だけフェンスの代わりのトレリスをセットバックさせるという配慮をしました。そのせいか、「花がきっかけで、見知らぬ人から声をかけられることが多いんです。花友達がたくさんできました」とNさんは話しています。そして竣工後、お披露目のオープンガーデンパーティーを行いました。50人ぐらい参加したでしょうか。震災後の久しぶりに楽しいパーティーでした。

震災で近所付き合いの大切さを学んだ私たちです。歩ける範囲にコミュニティーがあることが、豊かな生活ができる基本です。昔の日本によくあった縁側のある住まいのような、気軽に近所付き合いのできる家が欲しいという希望が増えています。

Nさんの住まいには仕事部屋もあり、多くの人が訪問しやすいようにさまざま工夫をしました。広々とした玄関ホールには、椅子も置けるように工夫しています。そして、階段まわりに絵と花が飾れるように作り付けの本棚をつくりました。

居間、食堂、茶の間と3室が引き込み戸で仕切られるように工夫をし、3部屋にも、ワンルームにも使えるように配慮しました。

台所は住まいの中心に置き、庭の花を眺めながら料理がつくれるように配慮しているので、家族全員が料理をつくるようになったとNさんは話しています。

地域のあちらこちらにNさんの住まいのような、サロンがあれば近所付き合いが楽しくなるでしょう。今後もこうした住まいを設計していきたいと思っています。

竹久夢二
「四つの恋のものがたり」

〈その十二〉人恋しい夢二、妄想に狂う
身ごもるお葉

中右 瑛

夢二が、モデルの佐々木カ子ヨにつけた「お葉」という名の由来は、歌舞伎通の夢二が最も尊敬し、そのファンでもあった播磨屋こと中村吉右衛門の美しい妹「お葉さん」を思慕していたことから…だという。

自虐的で、かなしい程に官能的でさえあるお葉。絶えず、側に女性がいなくてはおれない人一倍の寂しがりやで、人恋しい夢二。

夢二はお葉のために菊冨士ホテルの一室をあてがい、お葉との同居生活がはじまるのだが、お葉の特異な過去、お葉をアイドル視しているファンの画学生たちの存在が、夢二を絶えず悩ましつづけた。

特に、講演旅行や取材旅行中の夢二は、留守居のお葉のことがいつも気がかりだった。いま、どうしているのだろうか？　浮気はしていないだろうか…と。旅行中に、菊冨士ホテルのお葉に出した手紙が、いまも残されている。

「お葉や

私はもうこう呼んでもよいかしら。おまえはいまどうしているの。

忙しい合間に、こうして走り書きに手紙を書くのも楽しみの一つだ。

おまえに手紙を書くのも久しぶりだね。たまにはこうして遠くにいて手紙を書く心持ちも、懐かしくよいものだね。そう思わないか？

おまえが涙ながらに書いた日記は、まったくおまえの神に許されるざんげぶみだ。おそれにも私におくるものだと思ってはいけない。神さまへお返しするのだと思って書くのがよい。

私にはおまえを責めることも裁くことも出来ないのだから。その日記によって、おまえも私も救われるのだ。

そして、生れかわった新しい生れたての子供のような心持ちで、はじめから歩き直して行こうね。

おまえはどんなに罪のない子供になるだろう。

お葉ちゃん。

おまえはどうしているの。

ひとりで寝て、ひとりで起きて、そして誰とお話をするの？

枕をかかえてパパを呼んでいるのぢゃない？　粉おしろいをふりまいて、パパの匂いをかいでいるの？

寝るとき、おまえは下を向いて寝るの？

それとも、上を向いている？

手はどんな風にしている？　足をどんなぐあいにのばしている？

竹久夢二筆「与三郎」
お芝居「世情浮名横櫛」。俗に「お富与三郎」で知られた斬られ与三郎がタンカをきる名シーン。
夢二の男絵は中世的な甘さが醸し出されている

そして、もう直ぐ帰るよ

大正九年九月十九日、名古屋より気車中にて」

お葉の日記をつい見て、過去の行状や学生たちとの恋愛遊戯を知ってしまった夢二は、ワキタという男に異常なほどの嫉妬の炎を燃やしたのだった。

つづいてその翌日、お葉に出した手紙には、

「お葉どの

おまえはワキタといふ人間を知っているか？

その返事を一言書いて呉れるとよい。

夢で見たことがほんとうなら、ずいぶん私たちに苦しいはめになったものだ。そしておまえは、何といふ恐ろしい醜いことをしてくれたものだ。とり返しはつかない。しかし、おまえが、前からそのようにする積りでいたのなら、私の方がおまえの思い通りになったわけだ。しかし、それでおまえが私に勝ったと思ったら間違いだよ。おまえに負けてはいない。だが、おまえはそんな見えすいた、すぐにわかるようなことをして見せたのだから、無論、覚悟の上のことだろうね。

どんな夢だった、なんて、言っても駄目だよ。

この返事さえ聞けば、おれはもう東京へすぐ帰る必要はないのだ

九月二十日、尾州（名古屋）にて一草亭（夢二の別号）」

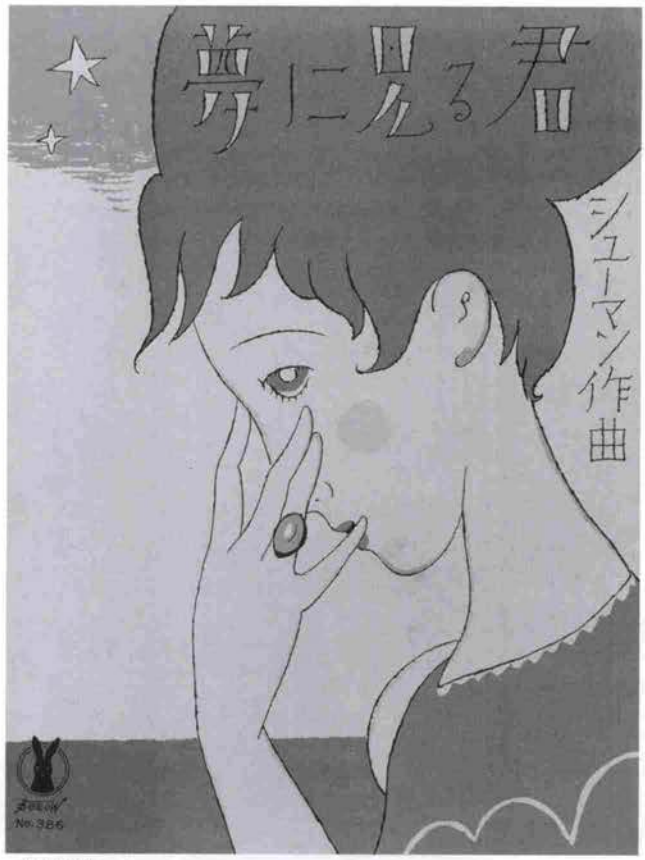
夢二は妄想、嫉妬に狂いはじめた。お葉と知りはじめたころ、お葉の恋人に会い、二人のロマンスを聞かされ、何か、いい知れぬ嫉妬に身をこがした、ことさえあった。

男の欲望に自然にこたえてしまうお葉。自由に生き、奔放に身をまかせ、男を渡り歩いた憎めない小悪魔。

そんなことが夢二の脳裡から離れない。夢二は、いつも恋に浸り、妄想にとりつかれ、嫉妬に狂うのだった。

そんなお葉と夢二は、大正十年八月、三年足らずの菊富士ホテル生活に別れを告げ、渋谷道玄坂の先、宇田川町八五七の新居に移り住むこととなった。

お葉は夢二の子を身ごもっていたのだった。



セノオ楽譜
「夢に見る君」夢二装画

■中右　瑛（なかう・えい）
抽象画家。浮世絵エッセイスト
1934年生まれ、神戸市在住
「受賞歴」行動美術展において奨励賞、新人賞、会友賞、行動美術賞受賞。浮世絵蒐集研究の功績により浮世絵内山賞受賞。半どん現代美術賞、兵庫県文化賞、神戸市文化賞など受賞。
現在　行動美術協会会員　国際浮世絵学会常任理事。著書に、抽象画集「シエリト・リンド／ミラクルブルーの世界」「浮世絵ミステリー巷談」「写楽は18才だった！」「忠臣蔵浮世絵」「豆本・夢二「黒猫綺譚」がある

連載 3

ミステリーグルメ 神戸篇

ONE DAY LILY

―― 一夜だけ咲く命の花 ――

ウドノ葉生子

新神戸駅

早速、東京時代のダチの警視庁捜査4課の通称コバこと課長の小林准に電話を入れる。

「いやあ、ジュリアン。久しぶりだなあ」

相変わらず低くて野太い声だが今日はいやにテンションが高い。

「どうしたの。コバさん、ずいぶん明るい声じゃないの」

「フフフ…わかるか。なんと今日は時効一日前で犯人逮捕ができたんだ。こんな嬉しいことはないよ。それでさあ。みんなで祝杯ってとこでね」

「そうか、道理でね。逆転の大ホーマーってとこか。そりゃあ、おめでとうございます。いやに聞き慣れない明るい声だからびっくりしちゃって」

今、警察が何かとたたかれて世間の目が白い中だからこそ、喜びもひとしおなのだろう。

「ありがとう。ところで、事件か」

さすがに僕の匂いを嗅ぐのが早い。

「お察しのとおり。まずその確率は高い」

「できるだけヘルプするけど、ものはなんだい」

「殺しの予告」

「ふーん。こっちにはあがってないんだろう？」

「そう」

「わけありか」

「らしい。一応、こちらの情報を送っておくので目を通しておいて」

「了解。ガードはしてんだろう」

「うん。バッチリ。ところで話は変わるけど数寄屋橋のバー（メルヘン）（03―3571―3787）の本田さとみママは元気かい」

「ああ、相変わらずさ。しかし、あの元気には負けるね。いつもお前がいつ東京に来るのかってさあ、まあ、うるさいこと、うるさいこと。もてる男はつらいネ」

「よく言うよ。しかし、男っぽいママなんだが変に女の色気もあったりしてね。それが魅力かなあ。今、銀座でもかなり古いだろ？」

「もう老舗のバーだよ。あそこはリーズナブルだから今度の事件が片づいたらワリカンで行こうか」

「ケチくさいこといわないでよ。コバさん友情にヒビがはいるよ」

「いや、今は世間がうるさくってね。企業でも2500円以上は領収書がいるらしいよ」

「たまらんねえ、ほっとけよ。そんなことに神経を

使うよりさ、本業の方でベストを尽くす方が筋。こんなくだらないことを気にしているとみんな小さな人間ばっかりになって大物が生まれないつまらない世の中になるよ。そうなれば遅かれ早かれいずれ日本は沈没」

「ホント、この頃いやに気が弱くなるよ」

「何がいけないかっていうとね、コバさん。お金をたらふく持ってる奴が全然遊ばないことなんだよ。お金を持ってさ、死ねないだろうに…ねえ」

と、ビンボーな二人だからこその話題で盛り上がってこれでいつも終わる。

次の電話は裏世界の新宿歌舞伎町の情報やくざである。堅気に戻りたいとの願望を持ちながら、やくざ所業からなかなか抜け出せない半端な男であるが、約束した仕事はキッチリ果たす一匹狼であって僕にとっては重宝なスタッフの一人である。

「オッサン、仕事、仕事」

「待ってました。ジュリアンの旦那。このところ不景気でねえ。ふところ具合が寒くって震えてたんですよ」

「そうか。グッドタイミングか。ところで今、ゆりがファックスを送っているがすぐにその物件に飛んで欲しい。君の地獄耳で情報を集め、その家に完璧に張り付いてほしいんだ。人数は任せるが頭と足の鋭い奴を選んでよ。もちろん資金はいつもの口座に振り込んでおく」

「任せてください。ジュリアンの旦那。ところで物々交換っていうんじゃないけど、この歌舞伎町に素人さんのスーパー美女がいましてね、旦那のことを話したらぜひ紹介してくれって」

「へーえ、あとでこわいお兄さんが出てくるんじゃないの」

「そんな馬鹿な。この私が旦那に弓引くようなそんなことするわけないでしょ」

「いや、冗談だよ。まあ、事件のカタがついたらね」

「女優より凄いんだから」

わかった、わかったと言いながらしっかり僕はメモリーにしまいこむ。

しかし、誰と話していてもこんな緊急時にも最後におんなの話…。やはり、僕の助平根性は見抜かれてるんだなあ。

一時間もたたないうちに携帯電話がピコピコ鳴る。

「旦那、中の様子がどうもおかしい」

「えっ、ジョージか。早いなあ」

「善は急げでね。ところが来てみるとお手伝いがいやに何回も出たり入ったりでね。なんかあたふたした感じで、そっちで確認とってくださいよ」

「よし、わかった」

ホテルの夫人の部屋に早速コールすると、

「まあ、先生。今、お電話しようと思っていたんですよ。また、脅迫状がきたらしいんです」

「そうですか。ともかく東京のご自宅に一緒に戻りましょう。奥さんを今から迎えに行きますからご用意ください」と言い残し、ゆりに細かな指示を与えてホテルオークラ神戸に向かった。

夫人は憔悴しきって声もない。お互い無言のまま新幹線の新神戸駅に急ぐ。プレイボーイの僕も為すすべもなしである。

週末の駅は帰京するビジネスマンであわただしい。毎日こんな賑わいが早く神戸にきてほしいなあ。地震と不景気でダブルパンチ。神戸市民も元気がない。

おやっ、上り線で僕たちの前を歩いているのは株式会社ノーリツの太田敏郎会長と竹下克彦社長だ。

「お久しぶりです」

「あっ、ジュリアン。君も東京?」

「ええ。仕事で」

太田会長は傍らの横田夫人の雰囲気をちらっと見やって、事の緊迫さが理解できたようだ。

「大変だね、君も。しかし、君が動くと世の中が危ういねえ」

「会長、事件発生ばかりじゃないですよ。未然に防ぐこともできるし」

「いや、君が静かでひまな方が日本も平和だよね」

裕次郎とバーメルヘンのママ

株式会社ノーリツ

「社長、助けてください。僕の飯の食い上げですよ」
「しかし、不穏な事件が多すぎるのも問題だよ」と傍らで竹下社長はにっこり。
困るなあ。まあ、いいや。ところで、この株式会社ノーリツはこの不景気のさなか、増収増益である。今、個人生活が重視され、ゆとりとやすらぎを求める新しい時代だからこそ、こういう生活関連の業種が求められるのだろう。こんな会社が神戸にいっぱいできたらなあ…。

元気と希望いっぱいの太田会長たちと疲労困憊の夫人と僕たちは皮肉にも同じ「ひかり」グリーン8号車で運命の対極をなしていた。
3時間少しで小雨降る東京駅に午後5時30分に到着。会長たちとはそこで別れ、僕たちは夫人迎えの超高級車ベントレーに乗り込んだ。
青山通りを左折して表参道に入る。相変わらずファッショナブルで個性的な若者たちで元気が溢れかえっている。森ビルを左折するともう一つの世界、鬱蒼とした木々がそれぞれの邸宅に大きな姿を落とし、信じられないぐらいの静寂の豪邸ゾーンをつくっている。
その中でも周囲を圧するのが問題の横田家であった。この近くでガードするジョージたちの目が僕たちを凝視してにやっと笑っているに違いない。
「このたびはいろいろお世話になります…」
送られてきた写真では穏やかな笑みを浮かべていた横田俊充もその表情はすっかり消え去り、深い苦悩が滲んでいる。
「これです。ご覧ください」
差し出された2回目の脅迫状は前回と同様、同質のワープロ用紙であって文面は簡潔な恐怖を伝えていた。

—ONE DAY LILY— この花の意味が真実となる日。それは今日。一日だけのお前の命—
「うーん。まだなんともいえないですね。ともかく、ガードはつけてありますからご安心ください」
深くうなずく俊充。
大邸宅の庭園は小さな森といえるほど緑の大木が密集していて、その生い茂った枝葉の狭間から小雨まじりの強い風がガーデンテラスに忍び込み、この沈鬱なラウンジの外で、時間と夜を気ままに弄ぶ姿にあたかも不吉な予感が…横田家の次なる運命の幕開けか。
夫の俊充はぐったりと疲れきり、深々としたイタリア製のソファに頭を抱え込んで座っている。傍らでその夫の横顔をじっと見つめる夫人。蒼白く透き通った夫人の細い手が、夫の骨張った痩せた肩をいとおしむようにそっと抱くのを僕はぼんやり見ていた。極限の夫婦の絆が試される時なのか。
「ところで申し訳ありませんが、本当に心当たりはないんですか」
「ありません」うつろな目であったが、ハッキリした声で俊充は答えた。「一生懸命考えてみたのですが、恨みをかうようなことは。そりゃあ、社員やお手伝いさんをやめさせたことはありますが、皆、円満退社で深刻な恨みはどうしても考えられません。ライバル会社だって普通一般的な競争はありますが、命まで狙われるような覚えはありませんから」
「ところで誰が脅迫状を持ってきたのですか」
「お手伝いの君子です」
「そのお手伝いさんを呼んでいただけますか」

現れた君子は中肉中背の少し骨太で丸顔の木訥な感じで現れた。のりがきいた真っ白なエプロンと白い木綿のシャツにグレイのスカート、そして化粧っ気のない顔にうっすらと透明色の口紅、爪にはマニキュアさえもない。
君子の年齢は32才だという。本人は事の重大さに震え上がってか、かなりの緊張度であって、キチンと立っているつもりなんだろうが、体が少し揺れて落ち着かない。

（つづく）

ウドノ葉生子
作家、TVイベントプロデューサーなど多様に活躍中。月刊神戸っ子に「松廼家ものがたり」連載。若者向け著書「音声多重面白構造」（三水社）で人気を集める。最近作「あぁ、万事塞翁がお・ん・な」（文園社）では神戸花隈の花柳界の歴史を綴る。ラジオ日本「ウドノヨーコのざっくバラエティ」のパーソナリティを阪神・淡路大震災まで務める。

神戸ファッション市民大学OBによるグループ　神戸のファッション都市化をめざす

K.F.S.NEWS 207

コウベ　ファッション　ソサエティ

事務局／神戸市中央区下山手通3−1−18
ツインズトアビル4F　月刊神戸っ子内
TEL.078−331−2246
FAX.078−331−2795

KFSマンスリーサロン

プロに学ぶ写真の撮り方（2回シリーズ）　講師／米田定蔵さん

プロカメラマンとして50年以上も活動を続ける米田定蔵さん（ＫＦＳ会員）に講演と実技を交えて写真の撮り方を学んだ今回のマンスリーサロン。

米田さんは写真家であった実兄の仕事を10代から手伝ううちにこの世界に入り、20代の頃は現在の電通の前身であった会社でコマーシャル映画を制作、その後自らの求める報道写真の分野に独自の感性をこめて道を究められ、現在も変わらぬ活動を続けられている。何十年にもわたる神戸港の変遷の様子や震災の記録など、いつも厳しく温かいカメラアイからの作品は、ロドニー賞受賞や各方面での個展などで周知の通り。

実技指導をする米田さん

写真の撮り方の実技指導では大がかりなセットを設営し、光線ひとつで作品がいかに変わるかを実際に試したり、またフィルム一枚が貴重であった時代から現在でもシャッターを押すときの変わらない心構えなどを聞き、特にシリーズ２回目の「肖像写真は心のかたち」と題した講座ではポートレートを写すときのポイントはその人物の環境をいかに表現するかである。被写体の人間性を一瞬のシャッターチャンスでとらえるために心を配ることが必要であると教えられた。

押せば写るカメラが全盛の時代だが、こう押してみようという意志をもって撮れば、今までよりも良い写真が撮れるのではないだろうか。実際に指導のもとお互いに写した作品は思いがけないできばえであった。（柿本・石原）

●ＫＦＳマンスリーのお知らせ●

神戸ハイカラ文化シリーズ

講演「神戸外国人居留地と15番館」

講師 園田学園女子大学国際文化学部教授
田辺眞人

日時／５月19日（金）18：30〜20：30

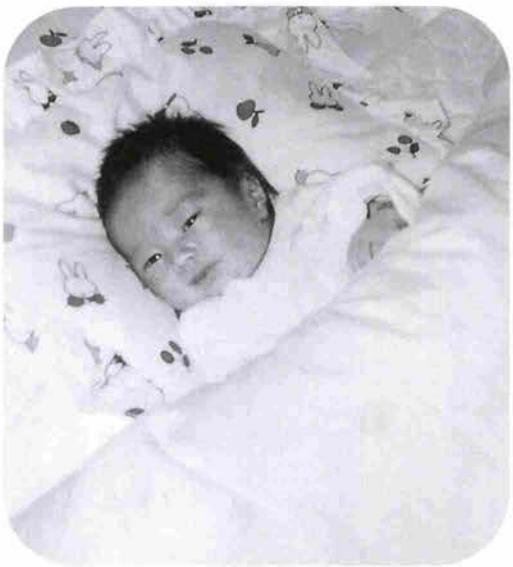
場所／カフェド神戸旧居留地15番館
神戸市中央区浪花町15番地

会費／3,500円

SAMOTO CLINIC

佐本産科

ママといっしょに



あかちゃん：米谷早加ちゃん（こめたにはやか）
（平成11年11月18日生まれ）
パ　　パ：直樹 さん
マ　　マ：純子 さん
「明るく活発な女の子になってほしい」

★佐本産科・婦人科★
佐本　学
神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078−575−1024（病室TEL:078−577−7034）
市バス上沢４停南スグ
●駐車場完備●